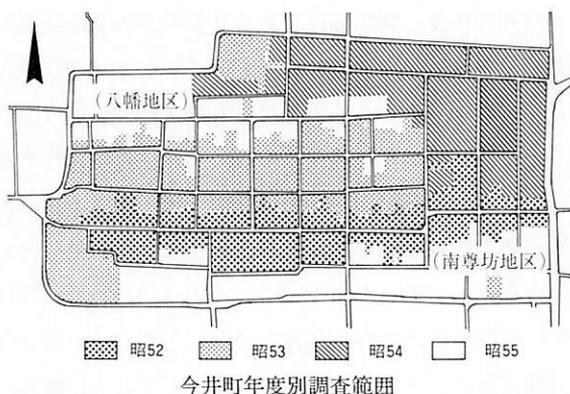


今井町の町並調査

建築物研究室

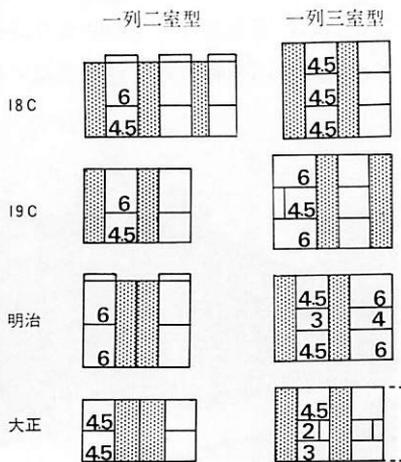
今井町の町家・町並調査は、昭和30年の東大今井町住宅調査団による調査を始め、昭和44～47年の当研究所と奈良女大の共同調査、昭和52～53年の文化庁・建設省による調査、昭和54年の橿原市による調査がある。昭和52年からの調査は、今井町の保全整備へむけての基礎調査であり、今年度は一連の調査の最終年度にあっている。調査



は、昨年同様橿原市が事業主体となり、大阪市立大学に委託したもので当研究所はこれに協力した。調査範囲は、今井町の東南の南尊坊地区、西北の八幡地区が中心で、調査内容は、地区の歴史の変遷、町家の現状平面、断面、立面の実測と復原調査、敷地利用調査等である。概要の紹介にあたって、まず当研究所が主となって調査した結果を述べ、次に過去4年間の調査のまとめをしておきたい。

八幡地区や南尊坊地区は、今井町の環濠に近い外周部にあたる。町の形成当初の様相は不明であるが、江戸時代の絵図や明治の地籍図によれば、これらの地区はその後の変遷の中で土地及び家屋所有の変更、宅地の細分化がかなり行われた地区である。現在は全体的に長屋が多くなっているのが特徴である。調査家屋数は250戸(うち103戸は補足調査)で、復原調査を行なった町家は約60戸である。棟割長屋のため必然的に平面の復原が可能になるものも加えると、総計87軒52棟になる。このうち54軒20棟が長屋で、残りの半数を小規模な一戸建町家が占める。年代的には18世紀に遡る町家は少なく、19世紀以降のものが8割を越える。平面型式は、一列二・三室型が全体の8割を占め、二列四・六室型は11棟と少ない。後者は全て一戸建で、うち6棟が当初から又は改造により喰違いの間取りになる。昨年度の北尊坊及び共栄町地区で典型的にみられた一戸建の分割、長屋各戸の統合といった戸数の変動は、これらの地区ではあまり例がない。一列二・三室型の小規模町家では明治以降特に戦後の増改築が目立ち、裏庭に別棟を建てるか、背面に庇を付けたり土間を改造するなどして部屋数を増している。二列四・六室型では、シモミセを改造して居室にするなど間取りの

18C
19C
明治
大正



長屋の平面形式

変更はみられるが、概して部屋数の増加要求は少ない。

長屋の平面は、一列二室又は三室を単位に2～5軒を連ねた形になる。年代的に18世紀以前に遡る遺構は少ないが、長屋の指図等によって、これらが少なくとも18世紀以来の基本型式であることが知られる。土間の位置に時代的特徴はない。居室部の面積は、一列二室型では各時代を通し一部屋4～6畳に納まるが、明治中期を極大にその前後は狭いのが特徴である。一列三室型では明治後期を境に一部屋7～8畳の広い群と一部屋4～5畳の狭い群に分化する。後者は、この時期に二階建長屋が出現することと関係しており、一列二室型の長屋とともに居室部の総面積は保たれている。

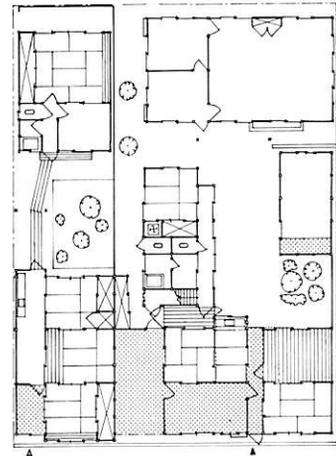
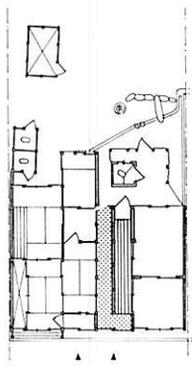
今井町は、形成当初からの町割を極めてよく残し、慶安3年(1650)建立の今西家住宅、寛文2年(1662)の豊田家住宅をはじめ、17世紀中頃から近代に至るまでの町家が建ち並んでいる。

したがって町家編年の上で、また町並を考える上で極めて重要な位置を占めている。過去4年間の調査で、今井町を構成する742の敷地単位の建造物を悉皆的に調査することが一応完了した。その結果、個々の建造物及び敷地利用の変遷と現状を把握することができ、同時に行なった社会調査で居住者の属性や定住性等とあわせて、地区の空間構造及び場の独自性を明確にすることができた。それらに基づき今井町の保全整備へむけて、地区の基本的な整備方針と具体的整備内容及び段階的事業計画も一応確立した。

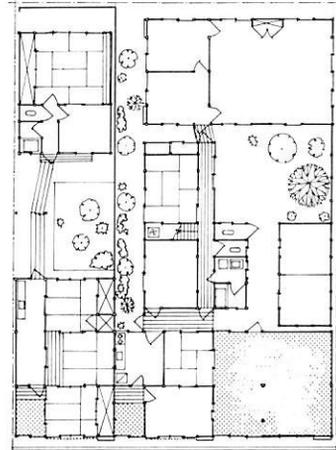
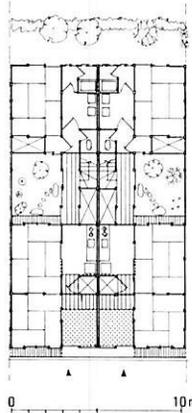
一方、今井町の歴史的研究の課題として、個々の町家の平面及び構造の系統的分析、町並を構成する諸要素の年代的分類整理と町並景観の変遷の把握、町内の6社寺の建築学的考察及び寺内町今井における位置付けを行なうこと、さらには、今井町の都市史的解析、特に江戸中期以降の変遷過程についての考察や、近世の南大和における今井町の位置づけを行なうことなどが残されており、今後の研究が期待される。

(亀井 伸雄)

現状



計画案



住宅の現状と計画案 (大阪市大作成)